

1920～30年代沖縄における「モダンガール」という問い

——植民地的近代と女性のモビリティをめぐって——

伊藤 るり

As part of an international collaborative research on modern girl and colonial modernity in East Asia, this paper focuses on the case of Okinawa. Despite the limited size of population of around 100,000 in the 1920's and 30's, and the poorly developed urban consumer culture, evidence shows that there was indeed a modern girl phenomenon in the capital city of Naha. How and why was this possible? Who were these modern girls? Where did they come from? In dealing with the conundrum of the modern girl question in the remote island of Okinawa, this paper casts light on the importance of mobility among young women belonging to the emerging new elite families and the migratory networks that linked them to Tokyo, Osaka and other cities of the Empire.

The paper is divided into three parts. The first part examines the emergence of girls' school culture in the early 20th century Okinawa, as a prerequisite of both “new women” and modern girls. Schools, a core institution of assimilation policy, were at the same time the locomotive for stimulating the desire for mobility. The second part focuses on the role of Iha Fuyū's intellectual circle in fostering “new women” and their cultural exodus to Tokyo in mid-1920's will be discussed. The third examines and analyzes portrait pictures of young women, daughters of the new Okinawan elite, published in the newspapers in 1934, and will reveal the politics of cultural capital and gender sought by modern girls and their parents through the practices of *yūgaku* (or pursuing one's studies in the urban centers outside of Okinawa).

キーワード：沖縄、近代、移動、ジェンダー、モダンガール

1 沖縄における「モダンガール」への接近

本稿は、植民地的近代という視座から1920～30年代の東アジアにおける「モダンガール」現象を問う、国際的な共同研究の部分を成す¹。この協働作業で筆者に与えられた課題は、沖縄の事例の検証である。沖縄の植民地的近代において、「モダンガール」はどのような位置を占めるのか。そもそも沖縄に「モダンガール」現象は存在したといえるのか。また存在したとするなら、それはどのようなものとしてあったのか。本稿はこれらの問いに応えるための、いわば足場を築く作業といえる。

本論に入るまえに、「モダンガール」という名辞で何を捉えようとしているのか、この点を簡単に確認

しておこう。日本におけるモダンガール現象は、1923年の関東大震災後に出現した大衆消費文化の台頭と緊密な関係にあると指摘されてきた (Sato 2003)。当時のメディアが「モガ」と揶揄を込めて呼んだモダンガールの出現は、1920年代半ばの東京や神戸といった都市におけるコスモポリタンな嗜好や美的感覚の受容との関連において把握されてきた。その具体的な姿は、たとえば1931年に撮影された影山光洋の写真「映画館の婦人席」に見てとることができる (図1)。この写真は、映画鑑賞という、新しい都



図1 影山光洋「映画館の婦人席」1931年
(Menzies, ed. 1998)

市的娯楽において、昭和初期のモダンガールたちがどのような装いを好んだか、そのファッションの広がりを示す。全体としては、ストレート、もしくはパーマの断髪、洋風メークアップ、ハリウッド映画の女優たちを模倣するような洋装、もしくは大正モダンの着物が目につく。とくに、後者の着物とパーマの断髪という組み合わせは、日本のモダンガールに独特な、ハイブリッドな雰囲気を生み出した。そこには、ジェンダー化された消費文化(化粧品、ファッション等)、誇示的消費、女性の身体とセクシュアリティをめぐる家父長制的統制への挑戦、コスモポリタンな都会的趣味などが含まれ、これらは新しい女らしさの感覚を生み出した。

なお、モダンガールに先行するようにして、1910年前後より、もっぱら青鞥社に集まった女性たちを指して「新しい女」という呼称が流通したが、こちらは、独立した人格、恋愛と結婚における自由、女性独自の文化の追究といった志向性をもつ、新しい感性の女性たちが対象であった。そこには都市大衆文化という文脈はなかった。「新しい女」とモダンガールのあいだに

は、平塚らいてうが銀座の「モガ」に対して否定的なコメントをしたように、一定の緊張感があり、必ずしも親和性があるとはいえない (平塚 [1927] 1983)。けれども植民地的近代がもたらした新しい女性主体の態様という意味では同時代の現象として位置づけることができる。沖縄の場合には、後述するように、この二つが本土以上に、圧縮された時間のなかで折り重なるようして顕在化し、そこには連続性が認められる。

沖縄におけるモダンガールという問題は、ほとんど研究の対象とはなっていない。近代沖縄女性史において、広くその存在を知られ、強い政治的なインパクトをもったひめゆり学徒隊とは対照的である。沖縄戦において看護要員として動員された女子学生と職員240人の自己犠牲的活動と悲劇的な最期は、1950年代以降、4回にわたって映画化され、こうした映像をつうじて、日本全国にあまねく知られるようになった。それは、反戦とナショナリズムという拮抗する感情のうねりを引き起こし、圧倒的な力をもつ近代沖縄の女性像を生み出してきた。これに対して、はたしてモダンガールが沖縄にいたかどうかという問題は、特に人びとの注意を惹いてきたとはいえない。

実際、戦前沖縄は、離島はもちろん本島も含めて基本的に貧しい農村社会であった。最大の都市であり、県庁所在地の那覇ですら、1920年代、30年代の人口は約10万人の水準にあった。これに対して、東京の人口は優に200万を超えていた。また、1920年代半ば以降、東京や神戸でモダニズムの文化が勃興していたころ、沖縄の経済は砂糖の価格下落を引き金として景気が停滞し、とくに農村部は「ソテツ地獄」

と呼ばれる窮乏化に苦しんだ。全体として、沖縄は大日本帝国の中心から遠く離れた、「内地」の南端に位置するだけでなく、資本主義的発展という意味でも周辺的な存在で、モダニズムの前提とされる都市的消費文化の基盤は薄弱であった。

にもかかわらず、沖縄のジャーナリストであり詩人であった牧港篤三（1912～2004）は、1930年代はじめの、若かったころを回顧しながら、那覇の裕福な人たちが住んでいた地区にある上之蔵通りから、断髪の若い女性が出てきたのに出くわしたことがあると述べている（図2）²。

福木と榕樹（ガジュマル）と赤瓦の屋根と、石垣を背景に持つ古い那覇の街に、いわゆるブルックス型（ルイズ・ブルックス「パンドラの箱」〈1929年封切〉の主演女優の髪型）断髪の凄い美人が歩いているのを見たことがある。瞳の大きく、それはよく沖縄にみうけられる、睫の深く濃い、どちらかと言えば丸顔の容貌が、その断髪に不思議に似合う和服姿で、足袋をはいていない素足に下駄の足が印象として残っている。（牧港 1986、p.110）



図2 牧港篤三「ルイズブルックスは那覇にもいた」
（牧港 1986、p.110）

この牧港のノスタルジックな描写は、那覇におけるモダンガールの存在に明示的に言及する、貴重な資料である。「映画館の婦人席」にすわる東京の姉妹たちと同様、牧港の文章でわたしたちの注意を惹くのは、女性の身体

に示される折衷的で、多層的な近代である。ルイズ・ブルックス風のボブ・ヘア、和服、そして素足に履いた下駄。足袋は使わずに素足で下駄を履く、という最後のディテールは、このモダンガールに亜熱帯の雰囲気を与えている。この女性はどこから出てきたのだろうか。そして、いったいだれだったのか。

モダンガールをめぐる国際的な共同研究において、沖縄の事例を取り上げることの意義は少なくとも二つある。

第一は、都市としてのインフラが限定的で消費文化が成熟したとはいえ地方都市に、いったいどのようにしてモダンガールが出現しえたのか、という疑問に関連する。結論を先取りすることになるが、銀座ほどの規模ではないにせよ、そうした新しいタイプの女性がたしかに那覇に存在したと考えさせるだけの根拠は、牧港のエッセイ以外にもある。ではどのようにしてそれが可能となったのか。筆者は、それを那覇を、東京や台北、そしてその他の植民地帝国日本の諸都市に結ぶ、多方向的な移動のネットワークに求めることができると考えている。こうしたネットワークの存在は、着実に沖縄にモダンガールを台頭させたし、実際、戦争がなかったなら、その数も無視できないほどに増えていた可能性はあるのではないかと。いいかえれば、帝国の周辺におけるモダンガールという問題は、植民地的近代への突入によって急激に拡大した女性のモビリティとのかかわりで接近することができるのであり、そのことは従来のモダンガール研究にない一面を浮き上がらせるだろう。

第二は、大日本帝国のなかに置かれた沖縄における植民地的近代と同化の力学という文脈である。この文脈でモダンガールを考えることは、帝都東京という地点から見えてくるモダンガールとはまったく

異なった問題の位相を導き出すことになるだろう。

沖縄は1879年、すなわち明治維新から11年後に「琉球処分」として日本に統合された。統合よりまえ、沖縄はおよそ500年にわたる中国との冊封関係、そして170年間の薩摩の統制下にあり、支配層の大多数が日本統合を拒否した。しかし、こうした状況は、日清戦争で清が敗れることにより、終止符をうち、沖縄の支配層における大和化が一挙に進んだといわれる。

日本における沖縄の同化は、台湾や朝鮮の同化経験と共通する部分をもつ。だが、北海道の場合と同様、沖縄は、日本の近代国家建設の初期段階で統合されたため、「内地」の周辺に組み込まれ、「内地」と「外地」のいわば結節点に置かれた。しかも、沖縄の統合は、もっぱら南洋への安全保障、領土拡大の視点からなされたため、台湾や朝鮮に比べても、経済的な投資は少なく、もっぱら同化政策に力が注がれた(小熊 1998)。このことは沖縄に初の県令が赴任した翌年に、会話伝習所が開設され、男性エリート層の「日本語」の学習が着手されたことにも見てとることができる。しかし、当時はまだ「国語」という概念も確立しておらず、「東京の言葉」(のちに「普通語」)が教えられていたのであり、「沖縄語」と呼ばれたものもおもに首里方言で、安定的なナショナルな言語としての「沖縄語」があったわけではない(外間 1971)。そうしたなか、日清戦争から3年後の徴兵令施行などを契機に、太田朝敷をはじめとする沖縄の新しい指導層は沖縄の日本への同化を急速に推進した。とりわけ20世紀初頭にかけてのこの過程は「風俗改良」とも呼ばれ、これを達成するうえで、女性は、将来の「母」として、重要な役割は負うと考えられた。

このように、近代、あるいは「モダン」という語で何が指示されたか、何が争点となったのかは、東京と沖縄とでは明白に異なった。東京において近代の表象は必然的に西洋文化と結びつけられたのに対して、沖縄の参照枠組は「他府県」、とくに東京であった。大和化は近代化を意味し、近代化とは国民文化の標準化を意味した。植民地的近代³の力学は、また、新しい国民国家としての日本による同化圧力に対して、沖縄の知識層がみずからを「沖縄人」と自覚し、のちに沖縄学と呼ばれる学問的運動を展開するという応答も含んだ。

本稿は三つの節に分かれ、最後に短い結論を付すことで構成される。まず次節では、20世紀初頭沖縄における女学生文化の誕生を取り上げる。それは、「新しい女」とモダンガールの双方にとっての素地を成す。同化政策において中核的役割を担った学校は、同時に、沖縄の人びとの階層の上昇意欲を掻き立てる発動機のような役割を果たした。学校には、本土で教育を受け、元薩摩藩出身も多かった教員が、みずから移住者となって沖縄に到来し、女子学生と接触した。そして、今度は女子学生が学校から巣立って行き、東京やその他植民地帝国の各地へと移動していった。それは、非対称の力関係を背景としながら、異なる文化が出会い、衝突し、争い、交渉する空間、M.L.プラット(Mary L. Pratt)のこぼを借りるなら、独特の「コンタクト・ゾーン」を成した(Pratt 1992)。第二に、取り上げたいのは、学校とは異なるモデルの近代を創造する場としての、伊波普猷の知的サークルである。沖縄学の創設者として知られる伊波とその知的サークルは、いわゆる沖縄の「新しい女たち」の台頭を促すうえで重要な場を提供した。そこで高等女学校出の、これらの「新しい女」のいくつかの特徴と彼女たちが志向した近代を検討する。第三に、1934年に琉球新報が掲載した「シリーズ 麗人を描く」を取り上げ、そこに紹介された38人の新エリート層の娘たちの経歴が示す家族や文化資本のなかに、モダンガールの輪郭を捉えていきたい。

なお、本稿での議論は20世紀初めに生まれ、1920年代、30年代に青春を過ごした女性たちの自伝、伝

記、ライフストーリー、また、高等女学校の同窓会誌に記されるエッセイなどを資料としている。とくに、「新しい女」のうち、金城芳子と新垣美登子のライフストーリーにかかわる資料を参考とした。いずれも那覇出身者であり、その意味で、本稿で述べる「沖縄」とは主として本島、しかも那覇および首里の地域のことを指していることを断っておきたい。

2 女学生文化の誕生——〈交渉される同化〉と近代

沖縄における女子教育は、男子の公教育に遅れること5年、1885年に開始した。琉球王国の時代、沖縄においては、士族などの階層の高い家族においても女子は教育を受ける機会がなく、非識字であったといわれる。外間米子と琉球新報の編による『時代を彩った女たち』(1996)には、「ノロ」の家に生まれた娘たちが、女子教育の導入に伴って、「良妻賢母」を担うべく学校教育に入っていく、霊的世界が重要な意味をもつ古い社会と世俗的なジェンダー役割を期待される新しい社会のあいだの役割葛藤にさらされる、衝撃的な物語も含まれている。大和化を介した近代化は、男性以上に女性にとって急激で、凝縮され、しかも加速されていた。この凝縮性や加速性は、たんに明治政府が同化を上意下達で進めたということだけでなく、沖縄の男性知識人がこの過程の促進を積極的に沖縄内部から支持したことによってもたらされた。

駒込武は、日本の植民地支配においては公教育が、欧米諸国の植民地支配においてミッション・スクールが果たした役割を果たしたと指摘している(駒込 1996、p.4)。教育勅語、「御真影」は、学校を通じて導入され、そうして皇民化が進んだ。学校はまた、「風俗改良」の推進においても重要な役割を担った。このことはとくに女子教育の重要な局面を成した。「普通語」による教育が始まって、琉装から和装への転換を含め、多くの面で「他府県」と同様となることが志向された(那覇女性史編集委員会編 1998、pp.328-364; 堀場 1990)⁴。

こうした女子教育において特に注目すべき存在として、沖縄県立高等女学校(1928年に県立第一高等女学校、通称「一高女」となる)と県立女子師範学校(「女子師範」)がある。県立高女は、沖縄の初めての高等女学校として1900年に設立された。設立されたときは私立だったが、1903年に県立となった⁵。これに対して、女子師範は教員養成を目的とし、1896年に女子講習科として開設された。1910年、沖縄師範学校に女子部が併置され、女子師範学校として、独立したのは1915年のことだった。県立高女と女子師範は、同じキャンパスに設置され、そのため生徒は互いにライバル感情をもったといわれる。女子師範は県内各地から生徒を募り、その多くが寄宿生活をしたのに対して、県立高女の生徒は那覇や首里周辺の者が多く、女子師範の生徒に比べてより都市的で洗練されていたという(金城 1980)。

1900年に入学した、私立高等女学校一期生20名のうちの一人、比嘉カメは、同級生のうち、一名を除く全員が、尚家の一族か縁者、でなければ他府県からの寄留商人を親にもつ者だったと述べている(沖縄県女師・一高女 1987、p.67)。しかし、女子師範ではしだいに沖縄各地から生徒が集まり、寄宿生は、普通語を学んだり、大和風の習慣を学ぶ一方で、各地の沖縄方言や生活文化をも発見するようになる。学校はまた、本土で教育された教員が、新しい知識や情報を提供してくれる場でもあった。

このようにしてできた新しい「コンタクト・ゾーン」では、古い身分制のヒエラルキーに代わるような、新しい社会的な卓越の感覚が生まれ、東京やその他の大都市の文化に直結する新しい文化資本が女学生のあいだに浸透していった。化粧、ヘアスタイル、服装に関するファッションは、こうした新しい

女学生文化の一部であった。上述の比嘉は、1900年に入学した段階で、「寄留商人を親に持つ方」は、「お化粧も上手にして、すっかり大人びた雰囲気でした」（沖縄県女師・一高女 1987、p.67）と感想を述べている。明治以前の沖縄においては、女性は化粧をする習慣があまりなかった。「僅かに上流社会で洗顔用に『手洗の粉（チュージナクー）』とよばれる青豆を石臼でひいて粉にしたものがつくられたに過ぎない」といわれ、化粧は、辻の遊郭の女性が行うものと一般社会では考えられていた（那覇市史編集室 1979、p.183）。そうしたなか、学校や寄宿舎で異なる地域、異なる背景の同世代の女子が集団で生活するなかで、母親の世代とは異なる、新しい女らしさの感覚を生み出していったようだ。ファッションをめぐる競争は急速に拡大したようで、たとえば1906年になると、県立高等女学校は服装規程を制定し⁶、華美な服装を禁止し、不必要なものは買ってはならないと、女学生の服装についての規制を始めている（川畑ほか編 1937、p.38）。

こうした新しい美的センスをめぐる競争は、服装だけに限られていたわけではなかった。1914年に県立高女に入学した金城芳子は、当時、女子がどのような日本語を話すかということについても競っていたと述べている。同級生のあいだでは方言を話し、教員と話すと、あるいは公的な場では「普通語」を話すというように、社会言語学でいうところの「ダイグロッシア」が成立していた⁷。しかし、同じ「普通語」を話すのであっても、東京のことばを話すことが「おしゃれ」、「モダン」だと考えられていた。また、こうした競争は「那覇っ子」と「ヤマトンチュ」のあいだで展開した。

「あの人たちにはどうしても負けたくない」と私たちはヤマトンチュに闘志を燃やしたが、当時私たちが直接間接に知っている大和人にもいろいろあった。

県庁の学務課長の娘とか、裁判官の娘とか“官人”の子弟は、親が短い期間の任期で動くものだから、来たかと思うと出て行く。時に東北のずうずう弁を私たちにからかわれる子もあていどで通り過ぎて、競争相手ではなかった。

テキは住みついているひとたちである。この人たちは経済力が強く、あるいは文化水準も沖縄の庶民より高く、学校でもできのいい人が多かった。もっともこの人たちも昔はいばったものだったらしいが、大正時代にはかなり地位は落ちていた。私たちの意識も敵意からむしろよきライバルという感じに変わってきていた。（金城 1980、p.134）

那覇の寄留商人の子どもたちと日常的な接触のあった金城らは、ヤマトンチュのなかにもあるヒエラルキーや優劣意識に通じ、これを対象化すると同時に内面化しつつ、そこにヤマトンチュとの競争に打ち克つバネを見いだしていたようである。特に、元支配層だった鹿児島県出身の子弟へのライバル意識は強かったようで、この点についても次のような記述がある。

……沖縄の進む方向はなにはともあれ大和化であり、日本本土のやりかたに習うという政策が沖縄中に浸透している以上、もともと大和である彼らは何かにつけ私たちが追いつき追い越すかっこの目標だった。私たちは、『くしゃみするのも他府県通りに』やるどころか、相手が鹿児島なまりのくしゃみをするならば、こちらは東京弁のくしゃみでいこうというほどの心意気で背伸びもしていた感じだ。（同上書、p.138）

ここで言及されているのは私立高等女学校の開校式（1900年）で、当時の沖縄の著名な言論人であった太田朝敷の演説である。太田は「女子教育は文明の度合いを測る指標」であると述べ、女子就学率が低い沖縄県としては、他府県に遅れないように、何ごとにも他府県に似せることが大切で、「極端にいへば、噓をする事まで他府県の通りにする」こと、積極的に同化することが沖縄の今日の急務だと主張した（太田 1900）。これに対して、「東京弁のくしゃみ」を模倣することで「鹿児島なまりのくしゃみ」をおとしめるという金城のレトリックには、太田が推奨した「大和化」が、じつはそれ自体入れ子状になった不安定なものであり、「他府県」という語の空疎を期せずして暴き、そのことで、同化抑圧を笑い飛ばしてしまう、という効果がある。つまり、そこには大和化（＝東京化）を逆手にとり、これを徹底して追究することで、元支配層の鹿児島県出身者をやりこめたり、同化の暴力をやり過ごし、逆に反撃に出るという、〈交渉される同化〉の局面を見いだすことができるのである。それはまた、どのようなものをモダンと認めるか、近代におけるモデルの選択という問題をも含んでいる。

金城はまた、親友の富永カオルが、休暇に東京へ出かけ、新しい髪型やファッションをもって帰ってきて、流行を作るファッション・リーダーだったと語っている。

……たとえば、休暇に大和へ行って、帰りにはルイズまげという新しい髪型を取り入れてくる。今まで前髪を取って頭のとっぺんでリボンで結び、後ろで一つに束ねていたのを、後ろからずつと襟足を見せて髪をあげ、頂頭部に夜会巻きのような編み込みの洋風まげをのせる。たちまちみんなが真似て学校中にはやる。さらにその髪を後頭部で二つに分ける変わった髪型もはやらせる。（同上書、p.113）

那覇にいる寄留商人の娘たちがファッションの主導権を握るのではなく、那覇から直接、東京へ出て、流行のモデルを選びとり、それを女学生のあいだではやらせる、という行動には、言語をめぐる駆け引きに似た力学を認めることができる⁸。

ファッションの問題は、校則をめぐる学校当局との争いも生んだ。女子講習科の学生であった近藤たねによれば、1901年のころ、首里の坂を上る通学に「和服でおたいこ結び」では不便なので、袴の採用を当時の校長、安藤喜一郎に願い出たところ、時期尚早と認めてもらえなかったが、その後、東京から来た新任教員の宮川スミ（のちの東京家政学院創始者、大江スミ）が袴をはいて登壇したことをきっかけに、袴の着用が許されるようになったと述べている（金城 1980、p.133）。この点に関連して、由井晶子は、安藤がその当時の沖縄県における和服着用について、実用的には袴が適切であっても、「風俗統一」の側面から和服着用が必要との見解を示していたことを指摘している⁹。

なお、服装という点で近代へのもう一つの回路であった洋装化が、沖縄の高等女学校に達したのは、鉄道や自動車文化が導入され、山形屋が西本町に店を新装（1923）するなど、那覇を中心に都市文化の基盤が整い始めた1920年代半ばである。本土では、1918年ごろから、『婦人之友』（1908年創刊）をつうじて、羽仁もと子が洋装化キャンペーンを推進していた¹⁰。こうした本土での動きを受けてのことかどうかははっきりしないが、県立高女では1922年に女学生の服装として和服がよいか洋服がよいかの論争があり、その4年後の1926年にセーラー服が制服として採用された（沖縄県女師・一高女同窓会 1987）。また、北部の国頭高等女学校でも、1925年の段階ですでに洋装の制服を採用していた（なごらん同窓会 1971）。

大和化が女学校の日常というマイクロ・レベルでどのような展開を示したかを物語るエピソードはあまたある。それらは、同化が一方向的でもなければ、一方向的なものでもなかったことを示している。大和化は交渉され、ジグザグした展開を示した。女学生たちは、学校のなかで培われた公的存在としての個人という感覚に基づき、新しく生み出された女学生文化とそのなかの美的センスにおける卓越をめざす競争に刺激された。また、「ヤマトンチュ」と呼ばれる人びとを同質的集団と見なすのではなく、そのなかにもある差異と差別化の所在を見極め、いわば「ヤマトンチュ」の脱構築を図りつつ、なにがモダンでありうるかをめぐって、同輩や学校権力とのあいだでさまざまな交渉を行っていた。いいかえれば、女学生たちは、あらかじめ定められた「他府県」とどのぐらい似ているかという「文明化の度合い」ではなく、学校というコンタクト・ゾーンに入れ替わり立ち替わり現れる若い教員や学生の姿、そして休暇などで東京を直接見聞して入手した情報などをつうじて、そのときどきの流行の動きにアンテナを働かせ、敏感に反応しながら、近代的感覚を研ぎ澄ましていったのである。

次節では、伊波普猷の知的サークルとそこに集った「新しい女たち」に焦点を当ててみたい。

3 恋愛と結婚における自由——伊波の啓蒙活動と「新しい女たち」

伊波普猷が比嘉静観らと沖縄組合教会を設立したのは、本土で『青鞥』が廃刊に追い込まれた1916年である(図3)。この教会には県立高女を卒業した、一群の若い女性たちが集った。そのうち、のちに沖縄の「新しい女」として知られるようになったのが、以下の5名である。富原初子(1888～1974)、真栄



図3 伊波普猷と「新しい女たち」。沖縄組合教会設立(1916年)の頃。前列左より永田八重子、真栄田冬子(伊波冬子)、比嘉初子(富原初子)、永田美津子、永田文子。後列左より知念芳子(金城芳子)、伊波普猷、比嘉静観、伊波普成(月城)、照屋寛範。(伊波普猷生誕百年記念会編 1976)

田冬子(1897～1975)、玉城オト(1897～1993)、金城芳子(1901～1991)、新垣美登子(1901～1996)¹¹。「新しい女」という呼称は、本人たちが自称したというのではなく、むしろ「女だてら」に男性知識人の知的サークルに参加し、かつまた後述するような恋愛と結婚における自由を標榜するその姿に対する、周囲からの揶揄を映し出すものであった。実際、組合教会が設立される2年前、1914年3月の県立高女の卒業式では、高橋琢也県知事がその祝辞で「只現今新しい女と命名するものは一種変態の行動をとる女子にして古来所謂新しからざる挙動をなし俗に謂う御転婆の所業を為すもの様です」(川畑ほか編 1937、p.113)と述べてお

り、当時の風潮を知ることができる¹²。それでは、これらの沖縄の「新しい女」が『青鞥』に代表されるような本土の「新しい女」とつながっていたかといえば、そのような可能性は小さいと推測される。たとえば、玉城は、同級生で文学少女だった真栄田をつうじて、『青鞥』の存在を知るようになり、何号か読んだ記憶もあるが、その影響はほとんどなかったと語っている(外間ほか編 1996、pp.113-114)。むしろ、これらの「新しい女たち」は、伊波の博識、「キリストぐわ小のよう」と慕われた人柄、そして何よりも沖縄女性の啓蒙に賭ける情熱に引きつけられるようにして、教会に集まった。

組合教会を始めるころ、伊波はすでに言語学者として、民俗学者としてよく知られていた。1906年に帝大を卒業したあと、1910年に県立図書館初代館長に赴任していた。大学が存在しなかった当時の沖縄において、伊波は知識界をリードする存在として重要だった。金城によれば、組合教会では聖書を読んだが、その活動の内容は、宗教的なドグマを学習するというよりも、人としての生き方や西欧の諸学問への入門を促し、ありとあらゆる分野の本を読むことを勧める、というものであった¹³。そうして、トルストイ、ドストエフスキーらの小説、シェークスピアの戯曲、哲学や社会科学の諸理論、美術史、さらにはエスペラント語の学習に接した。こうした伊波のサークルには、宣教師、研究者、学生、さまざまな人びとが、東京はもちろん、ハワイや南米などから往来し、トランスナショナルな人脈が形成されていた。この場をつうじて、「新しい女たち」は、欧米の社会、生活様式についての知識を得ることができ、大和化ということを経た近代の広がりについても認識することができた。

伊波のいまひとつの特徴は、沖縄の歴史に傾けた情熱である。1911年に発表された『古琉球』は、かれを沖縄のもっとも著名な学者とし、柳田国男や折口信夫の注目を浴びた。それから8年後に真境名安興と出版した『沖縄女性史』では古琉球における女性の地位を分析したあと、女子教育こそは沖縄にとっての緊急の課題だと結論づけている。伊波によれば、沖縄の男性がその社会的上昇への意欲——このことを伊波は「移住欲」と称している——を充足できるようになるためには、教育ある妻を得る必要がある(伊波 [1919] 2000、pp.82-84)。しかし、過渡期にあった伊波たちは、その友人たちも含め、多くの者が「不幸な不釣り合いな結婚」をなしたため、「車が一方の廻らない輪を中心として、同じ場所をぐるぐる廻るように、動かない妻を中心として、郷里という狭い範囲で活動」せざるをえなかったと述べている。このように伊波の沖縄女性に対する啓蒙活動の根底には、沖縄の「遅れ」に関する深い憂慮と同時に、沖縄の「青年」(=男性)がその立身を達成するうえで課せられてきた制限への憤りと欲求不満が横たわっていて、伊波はこのことを率直に認めている¹⁴。

しかしながら、「新しい女」の視点に立って見るならば、伊波の知的サークルは、独立した思考の場を提供し、近代への回路が一本ではないことを知る機会を提供した。だが、だからといって、伊波が同化を否定したということではない。『沖縄女性史』が示すように、伊波もまた、太田と同様に、女子教育において大和化を重視していたし、この点で、伊波には限界があった(屋嘉比 2003)。にもかかわらず、高等女学校における教育が「風俗統一」の名のもとに沖縄の歴史や文化に関して否定的であったのに比べ、伊波の知的サークルがそうした面における意識を「新しい女たち」にもたらしたことはまちがいない。「新しい女たち」は、「民族衛生講演会」と呼ばれた伊波の一連の講演旅行に同行し、遠隔地で伊波が方言を用いて、地元の女性たちに対し民族と家庭の「改良」を訴え、そのなかでの女性の役割に注意を喚起するのを聞いた。

こうした優生思想の影響が色濃い、伊波の沖縄に対する思い入れを、「新しい女たち」がどのように消化したかは定かではない。そもそも「新しい女たち」が思想ということにおいて、何かまとまりをもっていたかという点、それも明確にはいえない。唯一、これらの女性たちを結びつけてきたものは、伊波が提唱したようなヒューマニズム、とくに恋愛と結婚における自由への信念ではなかったか。

玉城の場合、伊波のサークルに出入りしていた山田有幹をつうじて社会科学研究グループにかかわるようになるが、既婚で子どももいる有幹と恋愛関係に入る。この「不倫」に対する社会の非難は厳しく、玉城はしばらくして勤めていた小学校を辞職せざるをえなくなる。のちに有幹と結婚し、生まれた息子に「冷人(レーニン)」と名づけたが、その後、子どもが病死すると、有幹と離婚、1927年には、再婚を

してブラジルに移民として出国した(外間ほか編 1996、pp.112-119;金城 1980、pp.343-344)。さまざまな社会的な圧力に抗して、ロマンチック・ラブを賛美するという志向性は、伊波のサークルに集まった青年男女に共通した特徴であった。このことは、最初の結婚で挫折したあと、妻子ある伊波その人と密かに恋愛関係に入り、ついには1924年にひとり那覇を離れて東京に移り、そこで伊波との生活を始めた真栄田冬子についてもいえる(外間ほか編 1996、pp.120-124;金城 1980;比嘉 1997)。

金城もまた女学生時代に母が決めた婚約者がいたが、組合教会に通ううちに、この結婚に疑問を抱くようになる。やがて山田有功(有幹の弟)と愛し合うようになると、有功もまた妻子ある立場であったため、今度は先に出奔した有功を追って金城が初めて大和へ出かけるという事態にいたった。有功との恋愛に終止符が打たれたあと、金城は1925年に東京に移り、そこで伊波のサークルのメンバーでもあった金城朝永と内縁関係となり、その後、改造社に一時期勤めたあと、ソーシャル・ワーカーとして、戦後まで東京で活動した。

伊波の沖縄における啓蒙活動もまた、1925年に伊波自身が東京に移り、真栄田と合流することによって幕を閉じた。この文化的な「大脱出(exodus)」とでもいうべき、東京への移動のあとの生活は、経済的な困難を極め、東京でのわずかな収入と、那覇で培ったネットワークに依存しつつ、かろうじて生き残りを図るものであった。しかし、金城芳子によれば、1920年代後半の数年間、ちょうど改造社での職もあったこともあり、東京のモガ、モボ全盛期に接して、「けっこう楽しいあまい時代」を享受できた(金城 1980、pp.302-307)。大正モダニズムのまっただなかに、沖縄出身の詩人、画家、小説家、学者らもまた身を置いた。東京という大都市の消費文化を享受していたとされるモダンガールと袖をすりあわせるようにして、沖縄を脱出してきた「新しい女たち」が生活していたことになる。

沖縄の「新しい女たち」は、『青鞥』の「新しい女たち」のように、特定のプロジェクトに即した活動を展開したわけではない。ただ、1910年代から20年代半ばまでの沖縄社会で彼女たちは、新しい知識の吸収と近代への希求によって際だった存在であった。沖縄の古くからある習俗や保守的な性規範に抗して、若い男性知識人との恋愛を貫くことは、彼女たちが取り得るもっともラディカルな行動だっただろう。

そうした情熱的行動は、この知的サークルが、すでに述べてきたように、宣教師、ジャーナリスト、学生、研究者などのコスモポリタンな志向をもつ人びとの集まりであるため、その文化的嗜好という点でも、那覇では最先端をいくモダンな集団だったということとも関係しているだろう。伊波自身、コーヒー、シガレット、ケーキ、ステーキ等、欧米の嗜好品に通じていた。たとえば金城は、練り歯磨きがまだ珍しい時代に、伊波のところでコルゲート歯磨きを見たり、コーンフレークといった食品があることを知ったと述べている(金城 1980、p.41;1988、p.85)。また、1930年代に入って、なかなか職が見つからず、東京での生活が窮乏していた時期にも、こうした嗜好品を手放さずにいたという記述が残っている(比嘉 1997)。

組合教会が設立されたころに撮られたと考えられる写真(図3)には、エレガントなスーツに身を包んだ男性陣に対して、女性は、当時はモダンと考えられていた束髪と着物、足袋という出で立ちで並んでいるが、この写真が象徴的に示すように、高等女学校を出たばかりの、自活力がまだ弱い彼女たちの目には、コスモポリタンな美的センスが輝くこれらの若い男性知識人は、新しい社会的な卓越の水準を示す先導役と映っていただろう。

4 新エリート層の娘たち——遊学とモダンガールの文化資本

「新しい女たち」のなかで、作家としてのキャリアを追究することができたのは新垣美登子である。彼女は、このことをユニークな方法で成し遂げた。新垣もまた、遊学中の東京で、小説家の池宮城積宝と出会い、電撃的な結婚を果たした。しかし積宝との共同生活は短く、新垣はひとり那覇に戻って県庁に勤務しつつ子育てをした。その後、再度の妊娠がわかると、新垣は美容師として自活の道を確保するため、1928年に東京のルイズ美容専門学校で学び、その後、1930年に那覇・西本町で、伊波が勉強会を開いていた家に「うるま美粧院」を開業した。那覇でおそらくもっとも早くに開いた美容院として、新垣の店は評判を呼び、当時まだめずらしかったパーマネントなど、ファッションをリードした。新垣は実質的にシングル・マザーとして二人の子どもを育てながら、美容院の切り盛りを行い、その稼ぎによって生計を安定させつつ、文筆業に励んだのである。

牧港が上之蔵通りから断髪の女性が出てくるところを見たというのは、ちょうど新垣が美容院を始めたこのころといえるだろう。1930年はまた、山形屋が大門前通りに新しい百貨店スタイルの店を出し、20人の「デパートガール」を募集した年でもある。募集の条件は「容姿端麗、頭脳明晰」で、このとき130人が応募し、最終的にはすべて高等女学校を出た20名が採用された。この当時のデパートガールは、和服姿で、化粧をすることが求められた。採用された20人のひとりだった大嶺勝子は、ネクタイ売り場の担当で、「看板娘なので、着付け、化粧には気をくばった」という（那覇女性史編集委員会ほか編1998、pp.119-120）。また、1934年には、店員の希望もあって、洋装の制服となった。当時の『琉球新報』は、「とてもスマートでモダンな洋服です、生地は藍色の絹ポプリン、白襟にバンドをきちんと締めた処、とても清楚な装ひ」と描写している。このころになると、学校教員、バス車掌、看護婦、電話交換手、銀行事務員など、新しい女性の職業が現れ、那覇にも「職業婦人」が登場した。

1934年の『琉球新報』にはまた、「麗人を描く」というシリーズが掲載された。このシリーズには1910年から1916年までに生まれた新エリート層の娘たち38名の写真と経歴が収録され、当時の若い女性の個人史にかかわる映像データとしては貴重な資料となっている¹⁵。撮影時に18～24歳の女性たちは、8名を除いて全員が沖縄に生まれている。父親の職業では、医者（歯科医を含む）がもっとも多く44%、次に実業家（24%）、政治家（14%）、そのほか法律家、公務員、ジャーナリストとなる。また、38名の現職は、「家事手伝い」が18人、事務職等勤め人と学生がそれぞれ6人、医師が2名、不明6名である。

彼女たちの特徴としては、さしあたり次の三つの点を挙げることができる。

第一は服装で、和服が28人、袴が2人、セーラー服が5人、洋装が8人であり、もはや琉装はひとりもない。洋装の8人のうち、4人は断髪で、はっきりとしたモダンガールの特徴を示している（図4～7）。この4人は全員が那覇に生まれている。

大久保睦子と木口智恵子の家族は、もともと大和出身だが那覇に定住している。大久保の父は徳島出身の医者で那覇には1896年に来た。クリスチャンである。木口の父は、鹿児島島出身で、やはり医者であり、1885年に那覇に定住した。大久保も木口も一高女で学び、卒業後、大久保は「東京駿河台女学院在学中」と記され、木口は那覇で歯科医として働いている。記者は歯科医を「女性の新職業」と記している。

ほかの二人は父親も沖縄出身で、仲吉敏子の父は医者とある。仲吉は、松山小学校を出たあと、東京へ行き、小石川高女を出て、そのあと日本女子体育専門学校で体操とダンスを学んだ。仲吉の写真には



図4 大久保睦子 (琉球新報 シリーズ「麗人を描く」1934)



図5 木口智恵子 (琉球新報 シリーズ「麗人を描く」1934)



図6 仲吉敏子 (琉球新報 シリーズ「麗人を描く」1934)



図7 安慶名千枝子 (琉球新報 シリーズ「麗人を描く」1934)

達者なペン運びの、アルファベットの署名が見え、そこからはこの女性のコスモポリタンな感覚が伝わってくる。弁護士の父をもつ安慶名千枝子は一高女を出たあと、東京女子美術学校刺繍科で日本刺繍を学んだ。この日本刺繍について、安慶名は「あんまり紹介されていませんので皆様へお広めしたいと思っています」と述べ、自らを沖縄に新しい文化を伝える存在として位置づけている。これら4名は、その容姿と服装からいって、影山が撮した「映画館の婦人席」に東京のモダンガールと並んで座っていても

なんら違和感のない存在といえる。

第二に、このシリーズが提供する情報で注目できるのは家族の背景や趣味に関する情報である。全体として強調されているのは、これら「嫁入り前」の若い女性が励んでいる「女性としての修養」である。それは将来の主婦という役割と緊密に結びつけて記述されている。いくつか例を挙げてみよう。

南嘉子さんは実業家南嘉次郎氏の令嬢です。芳紀二十二歳。とてもしとやかなお嬢さんで県立第一高等女学校のご出身。*嘉子さんはきわめて多趣味な方で、クラシカルな日本趣味に深く、長唄、琴、裁縫等日本婦人として若き日の修養に励まれております。

尚侯爵家々扶護得久朝章氏の令嬢方で向かって左が姉章子さん（二十二歳）右が妹節子さん（二十歳）です。お二人とも昭和七年春、お揃いで県立二高女を卒業なさいました。目下は家庭にあって母君の指図を受け主婦として健全な家庭を作り得る常識を養っておられ、お二人共自分本位に偏らず、家庭中心とする団らんに父君の感化を受け高い趣味を求められ常に明朗な嗜みを忘れぬ様務めておられます。

……明晰、気品こぼるる処女、田中千世子さんは芳紀二十歳*西本町の医師田中音吉氏の長女で昭和七年春県立二高女を卒業され、同年大阪市岡高女専攻科に一年学ばれ、和裁の方を専攻されました。*お琴と生け花に興味が高く、お四人姉妹のお姉様として目下家庭にあり家事のお手伝いやお琴、お花のおけいこに若き日本女性としての修養を積まれております。

「女性として」の、あるいは「日本女性として」の「修養」は、ほとんどどの女性の紹介にも繰り返し言及されている点である。趣味の中でもっとも多いのは生け花（26%）、長唄や琴の邦楽（22%）、裁縫（17%）だが、これらは「淑女」が結婚前に習得しておくべき、ステータス・シンボルとなっている。

その一方で、趣味のなかには、必ずしもこうした中流以上の家庭が自明としない趣味も含まれている。たとえば映画鑑賞、読書、写真、ダンスなどである。4人のモダンガールのうち、仲吉は自分の趣味は「ダンス」だと述べ、木口は「写真」と「映画」を挙げている。記者は木口のことを、「とても明るく、快活な方で、現代女性として修養を積まれ写真と映画に殊の外趣味が深く好愛のカメラでパチリパチリ撮影しておられます」（強調点は筆者）と描写している。ほかにも和服を着て写真に映りながらも、趣味として映画、社交ダンス、テニスなどを挙げる者もいる。こうした都市的趣味は、モダンガールの徴候を示すものといえよう。

第三に注目すべきは、これら38人の女性のうち、14人（全体の37%）が高等女学校卒業後、本土へ進学している点である。東京へ行った11名のほか、大阪、あるいは台北に行った者もいる。

38名のプロフィールを分析していくことで浮かび上がってくるのは、これら「令嬢」たちが属する沖繩の新エリート層家族におけるジェンダー関係の変化である。那覇の労働文化においては、「男逸女労」の表現で知られるように、女性の経済的貢献は大きかった。上層階級の女性でさえ、商いをしたり、織物等の工芸品を製造、販売し、家計に貢献した。明治時代の写真を見ても女性たちは、行商、市場での販売等、公共空間における取引を日常的に担っていたことがわかる。金城もまた、幼いころ、「一種の遊び」のようにして商いの訓練を母にいわれて行ったと述べ、「当時の那覇では女の子にとって商いも教養

のうちだった」と回顧している(金城 1980、pp.51-52)。つまりこうした労働のあり方では、家庭と公共空間の区別はさほど厳密ではなく、女性は、その両方を行き来して就労していたと考えられ、そのように子どもも社会化されていた。しかし、職業婦人といった都市的な労働のあり方が台頭してくると、新中間層においては、「家庭」が主婦にとっての特権的な空間として区別されるようになり、デパートガール等の職業も、「結婚前の腰掛け的」意味合いしかもたないものとして位置づけられてくる(那覇女性史編集委員会ほか編 1998、p.118)。女子の学校教育は「良妻賢母」教育を推進することで、「女性としての修養」の意味を変えるうえで重要な役割を果たした¹⁶。シリーズ「麗人を描く」に記述される若い女性の趣味や将来の主婦としての「修養」への期待は、こうした新エリート層家族におけるジェンダー関係の再編の進行を示しているのではないか。

そのような視点から見た場合、モダンガールが好んだ趣味の数々は、学校教育や新エリート層家族が期待した「修養」とは異質の都市消費文化を志向しており、「修養」とは一種の緊張関係を孕んでいたといえるだろう。それらは多くの場合、遊学を機に獲得されたものであったと考えられる。

遊学には家族と娘のあいだの異なる期待があった。一方で、娘にとってそれは自己実現の手段であり、家族における家長制的な統制からの解放であり、学校で身につけてきたよりファッショナブルなもの、モダンなものを求める競争心を充足させるものだった。これに対して、女子教育が導入された初期においては、たとえば富原初子がそうであったように、親は娘の教育に熱心ではなかったし、遊学に関しては、これを勧める学校と敵対する関係にあった¹⁷。だが、昭和初期になると、娘を「修養」のために本土に遊学させることは、その家族のステータスを示すための、むしろ重要な投資として見なされるようになったように見受けられる。そのような異なる思惑のなかで、娘たちが大都市から持ち帰ったファッションや趣味のなかには、親の目から見れば、主婦としての「修養」を超える、一種「過剰」なものが含まれていたのではないか。娘の側から見れば、そうした趣味こそは、モダンガールとしての自分たちの社会的な卓越を示す文化資本であったし、両親が課す家庭本位の「修養」に対して、個人本位の文化的自律を保証するものであったろう。

5 モダンガール、モビリティ、そして植民地的近代

本稿では、沖縄におけるモダンガール現象を読み解くにあたって、女子のモビリティの高まりに注目した。1920年代、30年代にニューヨーク、パリ、東京、あるいは上海で同時多発的に出現したモダンガールは、目眩くようなオーラを放つ都市消費文化を背景としていた。そのような環境がない沖縄でのモダンガールの出現を説明するのは、学校に生み出された「コンタクト・ゾーン」であり、女学生文化であり、そこを起点とするモビリティへの志向性である。女学生は、「他府県」から入れ替わり立ち替わり赴任する教員の姿に強いあこがれを抱き、自分たちのモデルを本土の、あるいは海外の都市文化のなかに求めるようになる。寄留商人はじめ那覇在住のヤマトンチュの娘たちと「那覇っ子」の競争によって活気づく女学生文化、同級生、卒業生、兄弟姉妹等の遊学や仕事探しをつうじた移動のネットワーク——これらは女学生の心になかに「移住欲」を掻き立てるに十分な刺激であったろう。移動のネットワークに参入できるようになること、それは彼女たちにとっていずれ到達したい大人の世界への入場切符ではなかったか。伊波の知的サークルをはじめ、さまざまな研究会や勉強会に集まった宣教師、ジャーナリスト、研究者、活動家といった「新しい男たち」は、大和化、否大和化を超えた近代を求めて、慣習的結

婚や伝統的家父長制を問題化し、「新しい女たち」と恋愛と結婚における自由の賛美において共振した。このことが、20年代半ばには、かれらの東京への文化的な大脱出をもたらした。

沖縄におけるモダンガールという問いについては、まだ多くの課題が積み残っている。現時点で仮說的にいえることは、モダンガール現象の背後には、遊学経験をつうじて娘たちが獲得してきた文化資本をめぐる、娘と親のあいだの緊張関係や新エリート層家族におけるジェンダー秩序の組み替えの問題が横たわっているのではないかという点である。同時にまた、本稿では、モダンガールという問題を捉えていくうえでの植民地的近代のパスpekティブの有効性、そしてこの広がりの中に併存する複数の植民地統治のレジームを相互参照しながらモビリティを高め、またモビリティを高めることで植民地的近代をかたちづくっていく主体としての女性に注目することの重要性についても一定程度、確認できたのではないかと考える。

沖縄のモダンガール現象は、短命に終わった。シリーズ「麗人を描く」の掲載から3年後の1937年、日中戦争が勃発し、それに伴って大和化への動きはいっそうの拍車がかかった。一高女では、1941年に、それまで自由だった髪型が学年ごとに決められ、「一年生はおかっぱ、二年生は分け髪、三年生は分けてむすぶ、四年生は三つ編み」となった（沖縄県女師・一高女同窓会 1987）。モダンガールの対極ともいえるべき「軍国少女」へ向かう圧力は、総動員体制の強化のもと急速に強まった。1944年には一高女と女子師範が統合され、翌年3月、生徒222人、教師18人が、南風原陸軍病院へ看護要員として配属される。240人中136人が死亡したひめゆり学徒隊の悲劇は圧倒的な衝撃力で記憶に刻まれることになった。そして、それに伴って昭和初期のモダンガールの記憶は掻き消えてしまったかに見える。しかしながら、本稿で見てきたように、沖縄におけるモダンガールという問題は、根底において、ひめゆり学徒隊を構成した同じコーホート、近代沖縄の新エリート層の娘たちと分かちがたく結びつけられているのである。

注

- 1 本稿が基づく研究は、お茶の水女子大学ジェンダー研究センターの国際共同研究プロジェクト「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール（通称「モダンガール研究会」）」（2003～2006年度科学研究費補助金（基盤研究A）研究代表者：館かおる）の一環であり、ここに発表するのはその中間報告である。また、本稿は米国・ワシントン大学の「世界の中のモダンガール」研究会が刊行予定の論文集のために用意した英文原稿を下地としている。本稿を執筆するにあたっては、資料収集や研究の進め方にいたるまで、宮城晴美氏（那覇市歴史資料室）から多くの示唆と支援をいただいた。記してお礼を申し上げる。また草稿の段階で、タニ・バーロウ（Tani Barlow）、リン・トーマス（Lynn Thomas）、プリティ・ラママーシー（Priti Ramamurthy）各氏、そのほかモダンガール研究会の仲間から貴重な助言をいただいた。ここに深く謝意を表す。
- 2 図2を掲載するにあたっては、牧港襄一氏のご快諾を得た。記して感謝を申し上げる。
- 3 本共同研究のメンバーであり、植民地的近代（colonial modernity）という概念を普及させるうえで、重要な役割を果たしてきたバーロウは、近著 *The Question of Women in Chinese Feminism* でこの概念の有効性を詳細に論じている（Barlow 2004, pp.87-90）。そのなかで、とくに本稿にとって重要と思われるのは以下の二つである。第一は、この概念が時間というよりも、面的、空間的広がりの中に近代を位置づけ、捉えていこうとする点である。第二は、併存する複数の植民地レジームのあいだでの相互参照性、相互関係性への着目であり、そのなかで作り上げられる近代を（半）植民地の側から捉えていこうとする点である。本稿ではモダンガールの出現を、植民地的帝国によって形づくられ、またこれを形づくるモビリティの力学によって説明しようとしている。しかも、このように移動する行為主体がどのように、併存する複数の植民地支配の関係性を相互に参照し、関連づけるかという点に注目しており、そ

の意味でバーロウの植民地的近代をめぐる議論に多くを負っている。

- 4 「風俗改良」は、標準語励行のほか、琉装から和装への転換、モーアシビやハジチといった沖縄におけるセクシュアリティやジェンダーにおいて中核的な役割を果たしてきた慣習の廃止を伴った。ユタ撲滅運動も含め、女性のありようは「風俗改良」の主要なターゲットであった。この点については、『なは・女のあしあと』（那覇女性史編集委員会、那覇市総務部女性室編 1998）の第7章を参照のこと。
- 5 沖縄では1930年までに首里、那覇、国頭に三つの県立高等女学校が設置された。
- 6 「一、衣服を新調する場合には単衣及び袴、綿入れの表地は参円を超過せざる様にすべし。決して絹布を用ふべからず。
一、袴、靴を新調する際には参円以上のものを購ふべからず。
一、洋傘は絹張を用ふべからず。
一、其他華美なる装をなさざること、必要ならざる物品を購求せざること等を等に注意すべし。」（川畑ほか編 1937：38）
- 7 ダイグロッシア（diglossia）とは社会言語学の概念で、複数の言語の間に、社会的機能が割り当てられ、一方が高位、他方が低位の位置を占める状態を指す。本来は一言語内部のなかの機能分化に注目したもののだが、J.A.フィッシュマン（J. A. Fishman）によって、それが異種の言語間関係についても応用され、公的な空間で用いられる言語（高位言語）と私的空間で用いられる言語（低位言語）の二つが明確に分かれているような状況を指すようになった。沖縄におけるダイグロッシアの展開については拙稿（1992）を参照のこと。
- 8 ちなみに、金城が言及する「ルイズまげ」とは、おそらく1912年にパリから戻り、皇族のファッション・アドバイザーとなった相原ミネ（別名マリー・ルイズ）が考案した髪型を指しているのだろう（早瀬 2003）。この相原ミネが開いたルイズ美容専門学校には、後述するように新垣美登子が学んでいる。
- 9 『なはをんな一代記』における由井の解説「女子の風俗(3)」に当時の安藤校長の見解が引用されている（金城 1980、p.133）。
- 10 羽仁もと子らによる洋装化キャンペーンについては、「東アジアにおける植民地的近代と摩登ガール」研究会における小檜山ルイ氏の報告から多くの示唆を得た（小檜山 2005）。なお、1927年に、初の沖縄県出身者として県立第一高等女学校校長となった川平朝令は、羽仁もと子が創設した自由学園の教育と経営方針に強い関心をもっており、学生に自給自足を奨励したという（沖縄県女師・一高女同窓会 1987、pp.165-166）。
- 11 当時の多くの沖縄の女性たちは独特のワラビナー（童名）をもっていた。「新しい女たち」も例外でなく、富原初子は「モウシ」、真栄田冬子は「マカト」、金城芳子は「マヅル」だったが、多くの場合、上京をきっかけとして名前を大和風に変えていった。
- 12 なお、堀場清子（1988）は、日本女子大学学長の成瀬仁蔵が、欧州での女子教育視察を終えて帰国した1913年の談話で、「新しい女」を「お転婆」と評し、これに対して平塚らいてうが「世の婦人達に」という文章を『青鞥』に発表して反論したと記している。
- 13 伊波は1895年11月から1896年3月にかけて起きた首里中学における英語科廃止問題をめぐるストライキに参加し、退学処分には遭っている。伊波にとって、西洋をつうじての近代とは所与のものではなく、闘いとしたものであった。
- 14 伊波自身も、親が決めた「無学文盲」の妻との結婚で悩んだ。「教育ある妻」を求める主張は、自らの経験にも根ざした切実な思いだったといわれる（伊波普猷生誕百年記念会編 1976、p.35）。
- 15 なお、1920年代半ばから1945年までの『琉球新報』は戦災で多くが消失しているが、ここで引用している1934年の記事は、個人が所蔵していた切り抜き記事で那覇市歴史資料室に保存されていたものである。資料を閲覧させていただいた同室に感謝する。
- 16 1932年、一高女の川平朝令校長は、家政科設置を申請するにあたり、以下のようにその理由を説明している。「毎年本校を卒業するもの約150名の中上級学校入学、もしくは一般修養のため、東京その他の県外に出づるもの2、30名。女子師範学校第二部入学者県内就職者及び家事に従事するもの4、50名を除く爾余の卒業生7、80名は、概ね中流階級の家庭の子女にして高等女学校卒業後結婚期にいたるまで相当年数あるにかかわらず、県外に出て修養するには多大の経費を要するため県内においてさらに一層の修養を希望するものあり」（沖縄県立女師・一高女 1987、p.164）。高等女学校を卒業してから結婚までのあいだの修養を中流家庭の女子が行うことは一種、規範化していたことがわかる。問題はそのため費用であり、家政科設置は、遊学が可能でない層にまでこの規範が浸透していることを背景に提出

された案だったようである。

- 16 東京女子高等師範学校への進学を目指していた富原初子は、父親の反対にあつて上京できず、小学校教師を2年勤めたあと、ハンガーストライキをして、父親を説得し、結局年齢制限にあつて女子高等師範学校には入れなかったが、日本女子大学に入学をはたした（外間ほか1996、pp.76-81）。

[追記] なお、「麗人を描く」シリーズで引用させていただいた4名の方々のご親族の所在を確認することができませんでした。お心当たりの方は、著者まで連絡をいただければ幸いです。

参考文献

- 伊藤り「沖縄口から沖縄大和口へ——『方言ブーム』にみる地域言語の継承——」『国際学研究』第9号（明治学院大学国際学部論叢）（1992）：pp.69-85.
- 伊波普猷『沖縄女性史』平凡社、[1919] 2000年。
- 伊波普猷生誕百年記念会編『生誕百年記念アルバム 伊波普猷』、1976年。
- 太田朝敷「女子教育と沖縄縣」『琉球教育』第55号（明治33年7月31日）、1900年、pp.154-156.
- 沖縄朝日新聞社編『沖縄県人事録』沖縄朝日新聞社、1937年。
- 沖縄県女師・一高女同窓会『ひめゆり——女師・一高女沿革誌——』1987年。
- 小熊英二『日本人の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで——』新曜社、1998年。
- 川畑篤郎ほか編『姫百合のかおり』姫百合会、1937年。
- 金城正篤、高良倉吉『伊波普猷——沖縄史像とその思想——』清水書院、1972年。
- 金城芳子『なはをんな一代記』沖縄タイムス社、1977年（引用は、再版、ほるぶ社、1980年より）。
- 金城芳子『沖縄を語る』ニライ社、1988年。
- 洪郁如「植民地台湾におけるファッションと権力」『接続』第4号（2004）：pp.2-20.
- 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、1996年。
- なごらん同窓会編『なごらん——50年記念誌——』1971年。
- 那覇市企画部市史編集室編『那覇市史 資料篇 第2巻中の7 那覇の民俗』、那覇市企画部市史編集室発行、1979年。
- 那覇女性史編集委員会、那覇市総務部女性室編『なは女性史証言集——生命のあかし——』1994年。
- 那覇女性史編集委員会、那覇市総務部女性室編『なは 女のあしあと——那覇女性史（近代篇）——』ドメス出版、1998年。
- 早瀬利之『マリールイズ 宮廷服装顧問』講談社出版サービスセンター、2003年。
- 比嘉道子「伊波普猷と女性たち」伊波普猷『沖縄女性史』平凡社、2000年、pp.329-354.
- 比嘉美津子『素顔の伊波普猷』ニライ社、1997年。
- 平塚らいてう「かくあるべきモダンガール」『平塚らいてう著作集 第4巻』大月書店、[1927] 1983年、pp.290-297.
- 婦人界編『遊学案内 東京の女学校』（『婦人界』臨時増刊第2巻第5号）金港堂書籍、1903年。
- 外間守善『沖縄の言語史』法政大学出版局、1971年。
- 外間米子監修、琉球新報社編『時代を彩った女たち 近代沖縄女性史』ニライ社、1996年。
- 堀場清子『青鞥の時代』岩波書店、1988年。
- 堀場清子『イナグヤナナバチ——沖縄女性史を探る——』ドメス出版、1990年。
- 牧港篤三『幻想の街 那覇』新宿書房、1986年。
- 三木健『那覇女の軌跡——新垣美登子85歳記念出版——』潮の会、1985年。
- 牟田和恵『『良妻賢母』思想の表裏——近代日本の家庭文化とフェミニズム』青木保ほか編『女の文化』（近代日本文化論第8巻）岩波書店、2000年、pp.23-46.
- 吉田文「高等女学校と女子学生——西欧モダンと近代日本——」青木保編『女の文化』（近代日本文化論第8巻）岩波書店、2000年、pp.123-140.

屋嘉比取「近代沖縄におけるマイノリティ意識の変遷」『琉球文化圏とは何か』（『別冊 環』第6号）藤原書店、2003年。
『琉球新報』、1934年。

Barlow, Tani. “Editor’s Introduction.” *positions: east asia cultures critique*, Vol.1 No.1 (1993), (Special issue: Colonial Modernity) : pp.v-vii.

Barlow, Tani, ed. *Formations of Colonial Modernity in East Asia*. Durham and London: Duke University Press, 1997.

Barlow, Tani. *The Question of Women in Chinese Feminism*. Durham and London: Duke University Press, 2004.

Ito, Ruri. “Modern Girl in the Periphery of Empire: Mobility and Colonial Modernity among Okinawan Women in the 1920s and 30s.” In *Interim Report “Modern Girl and Colonial Modernity in East Asia.”* Grant-in-aid for Scientific Research (A) (1) (head investigator: Kaoru Tachi), 2005, pp.73-80.

Kohiyama, Rui. “Not Imitation but Practicality: The Modern Girl and the Missionary Higher Education for Women.” In *Interim Report “Modern Girl and Colonial Modernity in East Asia.”* Grant-in-aid for Scientific Research (A) (1) (head investigator: Kaoru Tachi), 2005, pp.7-24.

Menzies, Jackie, ed. *Modern Boy, Modern Girl: Modernity in Japanese Art 1910-1935*. Art Gallery of New South Wales, Sydney, 1998.

Pratt, Mary L. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London and New York: Routledge, 1992.

Sato, Barbara. *The New Japanese Woman: Modernity, Media and Women in Interwar Japan*. Durham and London: Duke University Press, 2003.